

夫婦関係満足度の経年変化—U字型変化と規定要因—

赤澤淳子

(心理学科)

夫婦関係満足度の経年変化とその要因を検討するために、夫 632 名、妻 677 名の横断的データを分析した。夫婦関係満足度には結婚年数による差異が認められたが、中期以降の満足度の差は有意ではなく、U字型変化かどうかは判定できなかった。夫婦関係満足度への経済的満足度、会話時間満足度、家事分担満足度の影響を分析した結果、結婚 10 年未満では夫は家事分担満足度、妻は経済的満足度と家事分担満足度、それ以降では夫婦とも会話時間満足度であった。

【キーワード 夫婦関係満足度 横断データ 結婚年数】

問題と目的

社会では、核家族化、少子化、長寿化によって夫婦 2 人で過ごす時間が大幅に伸びている。そのため、夫婦の関係性は各個人のライフサイクルにおいて大きな比重を持つようになってきている。欧米では夫婦関係に関する研究は古くから盛んに行われているが、日本でも、1990 年代以降、夫婦関係満足度や結婚満足度¹⁾の規定要因についての研究が増えてきている（伊藤，2014）。これまでの研究では、夫婦関係満足度の規定因子として本人または配偶者の属性（職業，収入，学歴，健康など）や夫婦の伴侶性（家事・育児の分担，会話，一緒にいる時間など）との関係を分析したものが多く（木下，2004）。女性の社会進出が増え，共働き世帯が多くなるにつれて夫婦の性役割分担が見直されるようになり，夫婦関係満足度におけるジェンダー差の問題も研究されている（池田，2014）。しかし，これらの研究は夫婦のライフステージにおけるある時点の満足度を対象にしたものであり，結婚年数やライフステージによる夫婦関係満足度の差異に関する研究は日本ではまだ少ない。

欧米では夫婦関係に関する研究は古くから盛んに行われているが，その中で夫婦関係満足度の変化を調べた研究の多くは，満足度は結婚当初から下がり始めるが，子が巣立った後に回復し，全体として U 字型の変化になることを示してきた（Anderson, Russell, & Schumm., 1983; Cowan & Pape-Cowan, 1988; Miller, 2000; Rollins, & Feldman, 1976）。日本でも 1990 年代以降，夫婦関係満足度または結婚満足度を従属変数にした研究が増えてきたが（木下，2004），結婚年数や夫婦のライフステージとの関係について調べた研究はまだ少ない。NFJ98（第 1 回全国家族調査）のデータを分析した稲葉（2004）によれば，結婚満足度の経時的変化は欧米の研究結果と同様，満足度は結婚初期から低下し，結婚年数 21 年から 25 年の間で最低になり，その後は回復する U 字型の変化になることが示されている。また，伊藤（2014）では，70 代の夫・妻の夫婦の愛情度は 40 代の夫・妻より高く，年齢とともに上昇しており，子育てが

終わった頃から高齢期にかけて夫婦間の愛情度が高まることが示唆されている。

一方、夫婦関係満足度の変化は U 字型ではなく、結婚後一貫して下がり続けるとした研究が 2000 年前後から現れている。VanLaningham, Johnson, & Amato (2001) は、夫婦関係満足度に関係する 17 年間のパネルデータを解析し、満足度は結婚期間を通して下がり続けると結論し、結婚年数と満足度の関係が U 字型になるのはコーホート効果による見かけの現象であるとした。すなわち、結婚年数の長い高齢な夫婦が結婚した頃は、結婚をより実利的に捉え、結婚に対する周りの援助が厚く、生涯結婚を規範としていた時代である。そのため、結婚晩年に満足度が回復するよう見えるのは、結婚年数に伴う変化ではなく、世代による結婚観の違いにすぎないと考えた。同様に、Glenn (1998) もパネルデータから夫婦関係満足度の変化は U 字型にはならず、一貫して下がり続けることを示した。

日本では、永井 (2005, 2011) がパネルデータを用いて結婚年数と妻の夫婦関係満足度の関係を分析している。永井 (2011) によると、全調査年度のデータをプールして結婚から 29 年目までの満足度の変化を示した図では、小さな増減を繰り返しながら低下し続けた満足度は 26 年目で上昇に転じ、全体として U 字カーブを描いている。しかし、パネルデータ分析では U 字型にはならず、結婚から数年の間に満足度が急激に下がり、その後は一定の割合で低下した。その結果から永井は、妻の夫婦関係満足度は U 字カーブを描くことはない結論した。

結婚後 20 年前後までは夫婦関係満足度が下がることはこれまでのどの研究でも共通した結果であり、その主要な要因は新婚期のいわゆる「ハネムーン効果」の消失と子どもの誕生による「親への以降」と考えられている。欧米では第 1 子の誕生が夫婦関係に及ぼす影響について多くの研究がある (Demo & Cox, 2000)。日本でも、堀口 (2002) や佐々木・高橋 (2007) が第 1 子誕生前後の夫婦関係について縦断的調査を行っている。ライフステージにおける子の影響は第 2 子以降についても想定されるが、それについては欧米では古くから研究されている子ども数と夫婦関係満足度の関係から見るができる。Marini (1980) は、1960 年以前では子が増えると夫婦関係満足度が低下する負の相関を示した研究はあるが、その後は有意な相関はないとする研究が多いことを指摘し、自らの調査でも夫婦関係満足度は子ども数とは無相関であるとした。しかし、Twenge, Campbell, & Foster (2003) による子ども数と夫婦関係満足度に関する 1974 年から 2000 年までの文献についてのメタ分析では、両数値の間に有意な負の相関があることを示している。日本では、子ども数と夫婦関係満足度の関係に注目した研究は見当たらない。山口 (2007) が妻を対象に夫婦関係について調査したパネルデータを分析した結果では、夫婦関係満足度は第 1 子の誕生時に有意に下がるが、第 2 子、第 3 子の誕生では有意に下がらないとした。

子がいる夫婦のライフステージ後半に起こる大きなイベントは、子が自立して家を離れ夫婦だけの生活に戻る「子の離家」である。欧米の研究では、子の離家によって夫婦関係満足度は上昇する傾向があり、満足度の経年変化が U 字カーブになる主要な要因の 1 つとされている。夫婦関係満足度が子の離家

によって上昇することは、White & Edwards (1990) による米国の 1000 名以上の既婚者を対象にした 8 年間の縦断データからも明らかにされている。日本では縦断的な調査で夫婦関係満足度と子の離家との関係を調べた研究はないが、前述したように稲葉 (2004) によって日本でも横断的データから夫婦関係満足度が U 字型に変化することが示されている。しかし、稲葉は、満足度の U 字型変化の主要因は結婚年数であり、これに末子 18 歳以下の存在というライフステージ効果が加わって U 字型の変化が強調されるとし、欧米の研究とは異なる解釈をした。

調査対象者の結婚年数と平均的なライフステージは連動しているため、どちらを説明変数にしても夫婦関係満足度の変化の様相に大きな違いはないことが予想される。しかし、個人レベルで夫婦関係の変化を考えた場合、2 つの説明変数のどちらが主要因であるかは大きな違いであり、夫婦関係を理解する上で本質的な問題でもある。そこで本研究では、夫婦関係満足度の変化の主要因が年齢や結婚年数なのか、ライフステージなのかを横断的データの比較から改めて検討することを目的とした。また、夫婦関係満足度に影響を及ぼすと考えられる、経済的満足度、夫婦の会話時間満足度、家事分担満足度についても同様に検討した。さらに夫婦関係満足度の規定要因についても検討することとした。

方 法

1.調査対象

無作為に選んだ A 県内の各種事業所等に依頼して夫用、妻用を 1 組とし計 2000 組のアンケート用紙を配布した。回収数は 1472 件 (回収率 36.8%) であった。このうち、夫婦ペアのデータは 570 組、夫婦は 1144 名 (夫 547 名、妻 597 名) であった (平均年齢: 夫 43.69 歳、妻 41.89 歳)。年齢層は夫婦とも 30-40 代が 6 割以上を占めた。回収した質問票のうち、分析に必要な項目の未記入回答やフェイスシートの年齢等が誤記入と考えられる回答は除外した結果、分析に用いた有効回答数は夫 632 件、妻 677 件、合計 1309 件となった。

2.調査内容

(1) フェイスシート: 性別、年齢、結婚年齢、子の年齢と同居・別居の区別、学歴、収入など基本的属性について記入を求めた。

(2) 結婚年数: 結婚した年齢から現在の年齢を差し引いて求めた。

(3) 夫婦関係満足度: 諸井 (1996) が翻訳した Norton (1983) による QMI (Quality Marriage Index) 6 項目を採用し、5 件法で尋ねた (Table 1)。6 項目の回答の平均値を夫婦関係満足度とした。

Table 1 夫婦関係満足度の質問項目

-
1. 私たちは、申し分のない結婚生活を送っている
 2. 私と妻（夫）との関係は、非常に安定している
 3. 私たちの夫婦関係は、強固である
 4. 妻（夫）との関係によって、私は幸福である。
 5. 私は、まるで自分が妻（夫）と同じチームの一員のようにであると、本当に信じている
 6. 私は、夫婦関係のあらゆるものを思い浮かべると、幸福だと思う
-

(4) 経済的満足度・夫婦の会話時間満足度・家事分担満足度：経済的満足度、夫婦の会話時間満足度、および家事の分担満足度について、満足（5点）から不満足（1点）までの5件法で尋ねた。

3. 手続き

調査対象者のプライバシーが守られるように、調査票は無記名で、調査票は、夫用、妻用の調査票を1組として通し番号を記入し、A県内の無作為に選んだ各種事業所等に依頼して2000組を配布した。調査票の封筒には返信用封筒2枚と、配偶者の回答に影響されないように「記入する際にはご夫婦で相談せず回答いただき、調査票は別々の封筒に入れてご返送ください」（下線部は強調表示）という注意書きを添えた調査依頼文を同封し、郵送法にて回収した。

4. 分析方法

分析にはSPSS for Windows Ver.24を用いた。分散分析の下位検定にはTukey法を用いた。

結 果

夫婦関係満足度等における夫と妻の差

夫婦関係満足度、経済的満足度、夫婦の会話時間満足度（以下、会話時間満足度）、家事分担満足度について夫・妻間で平均値の差の検定を行った結果、夫婦関係満足度、経済的満足度、家事分担満足度において有意差が示された（ $t(1307) = 2.81, p < .01$; $t(1307) = 2.58, p < .05$; $t(1307) = 8.38, p < .001$ ）。夫婦関係満足度および家事分担満足度では夫が妻より高く、経済的満足度では妻が夫より高かった。会話時間満足度では有意差は示されなかった（ $t(1307) = 0.47, n.s.$ ）。

年齢による満足度の差異

夫婦の年齢により、20歳代、30歳代、40歳代、50歳代、60歳代以上に分け、夫妻別に5群間で、夫婦関係満足度、経済的満足度、会話時間満足度、家事分担満足度について1要因の分散分析を行った。Figure 1に夫の結果を、Figure 2に妻の結果を示した。また、夫と妻の群ごとの人数と平均年齢をTable 2に示した。

分散分析の結果、夫では夫婦関係満足度において群間に有意差が示され ($F(4, 627) = 3.22, p < .05$) , 下位検定の結果、20歳代は40歳代および50歳代より夫婦関係満足度が有意に高かった ($p < .05$) 。経済満足度でも群間に有意差が示され ($F(4, 627) = 3.01, p < .05$) , 下位検定の結果、60歳代以上は20歳代より経済満足度が有意に高かった。会話時間満足度では群間に傾向差が示され ($F(4, 627) = 2.35, p < .10$) , 下位検定の結果、60歳代以上は30歳代より会話時間満足度が高い傾向にあった ($p < .10$) 。また、家事分担満足度においても傾向差が示された ($F(4, 627) = 1.96, p < .10$) が、下位検定では有意差は示されなかった。

同様に、妻においても夫婦関係満足度において群間に有意差が示され ($F(4, 672) = 3.50, p < .01$) , 下位検定の結果、20歳代は40歳代および60歳代以上より夫婦関係満足度が有意に高かった ($p < .05$) 。経済満足度と会話時間満足度においては、群間に有意差は示されなかった ($F(4, 672) = 0.59, n.s.$; $F(4, 672) = 1.75, n.s.$) 。家事分担満足度においては群間に有意差が示され ($F(4, 672) = 4.60, p < .01$) , 下位検定の結果、20歳代は30歳代、40歳代、50歳代より有意に満足度が高かった。

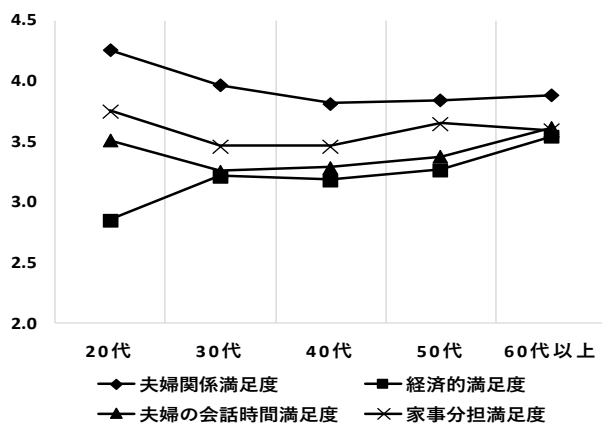


Figure 1 年代別にみた夫の満足度

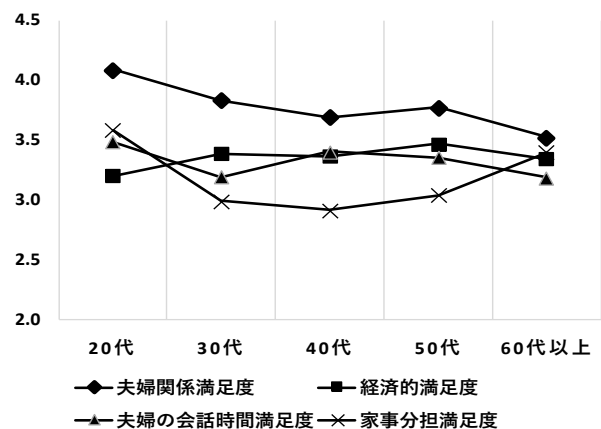


Figure 2 年代別にみた妻の満足度

Table 2 夫と妻の年代別平均年齢

		20代	30代	40代	50代	60代以上
夫	人数	41	214	193	127	57
	平均年齢	27.15	34.51	44.39	53.56	65.72
妻	人数	60	237	231	111	38
	平均年齢	27.12	34.32	44.19	53.62	64.13

結婚年数による満足度の差異

結婚年数について0年から29年までを5年刻みで区分し、30年以降をまとめた計7群に分け、夫妻別に7群間で夫婦関係満足度等について1要因の分散分析を行った。Figure 3に夫の結果を、Figure 4に妻の結果を示した。夫と妻の群ごとの人数と平均年齢をTable 3に示した。

分散分析の結果、夫では夫婦関係満足度、経済的満足度、会話時間満足度において群間に有意差が示された ($F(6, 625) = 6.02, p < .001$; $F(6, 625) = 2.13, p < .05$; $F(6, 625) = 4.47, p < .001$)。下位検定の結果、結婚年数が0-4年の夫は、その他の夫より有意に夫婦関係満足度が高く、結婚年数が0-4年および30年以上の夫は、10-14年および20-24年の夫より有意に会話時間満足度が高かった ($p < .05$)。夫の夫婦関係満足度は結婚当初から有意に低下し、結婚20-24年に最も低下した後、上昇するU字型を示した。しかし、20-24年と30年以上の2群の差は有意ではなかった。会話時間満足度においては晩年で有意に上昇するU字型変化が示された。家事分担満足度では群間に有意差はみられなかった ($F(6, 625) = 1.78, n.s.$)。妻では、夫婦関係満足度および家事分担満足度において群間に有意差が示された ($F(6, 670) = 2.52, p < .05$; $F(6, 670) = 3.89, p < .01$)。下位検定の結果、結婚年数が0-4年の妻は、15-19、20-24年の妻より夫婦関係満足度が有意に高く、結婚年数0-4年の妻は10-14年、15-19年、20-24年の妻より有意に家事分担満足度が高かった ($p < .05$)。すなわち、妻の夫婦関係満足度は、夫と同様に結婚当初から10-14年まで有意に低下するが、数字上20-24年でやや持ち直すものの、晩年で上昇する有意なU字型変化は認められなかった。経済的満足度および会話時間満足度では有意差は示されなかった ($F(6, 670) = 0.74, n.s.$; $F(6, 670) = 1.49, n.s.$)。

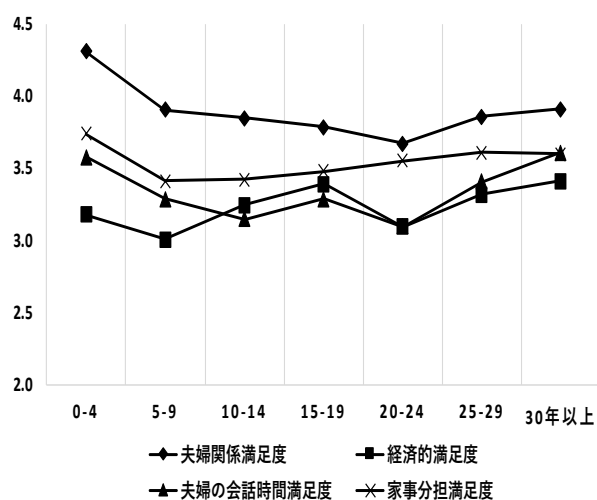


Figure. 3 結婚年数別にみた夫の満足

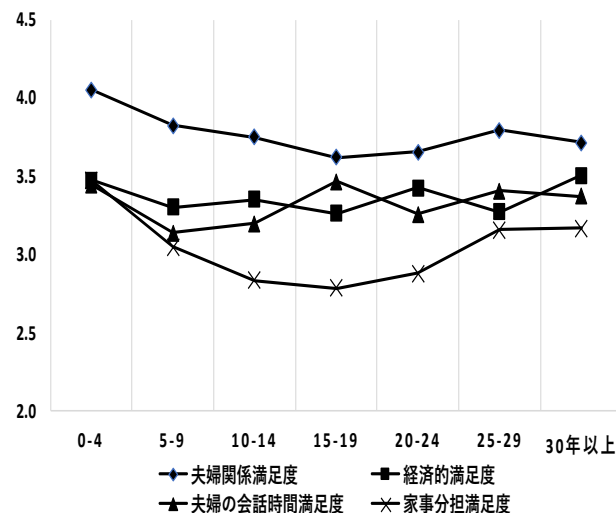


Figure. 4 結婚年数別にみた妻の満足度

Table 3 夫と妻の結婚年数別平均年齢

		0-4	5-9	10-14	15-19	20-24	25-29	30年以上
夫	人数	95	116	114	77	74	69	87
	平均年齢	31.23	34.89	39.54	44.60	48.88	52.81	62.03
妻	人数	96	121	116	90	84	76	94
	平均年齢	29.61	33.51	37.97	42.34	46.06	50.53	58.88

ライフステージ（末子年齢と子の離家）による満足度の差異

末子年齢の最初を0-6歳群とし、その後6歳間隔で24歳までを分け、25歳以上はまとめて1群にし、計5群に分け、夫妻別に5群間で夫婦関係満足度等について1要因の分散分析を行った。Figure 5に夫の結果を、Figure 6に妻の結果を示した。夫と妻の群ごとの人数と平均年齢をTable 4に示した。分散分析の結果、夫では夫婦関係満足度と会話時間満足度で群間に有意差が示された ($F(4, 542) = 2.74, p < .05$; $F(4, 542) = 4.45, p < .01$)。下位検定の結果、末子年齢が0-6歳の夫は、13-18歳の夫より有意に夫婦関係満足度が高く、末子年齢が25歳以上の夫は、0-6、7-12、13-18歳の夫より有意に会話時間満足度が高かった ($p < .05$)。一方、妻においては全ての満足度において群間に有意差はみられなかった ($F(4, 591) = 1.83, n.s.$; $F(4, 591) = 1.21, n.s.$; $F(4, 591) = 1.70, n.s.$; $F(4, 591) = 1.56, n.s.$)。

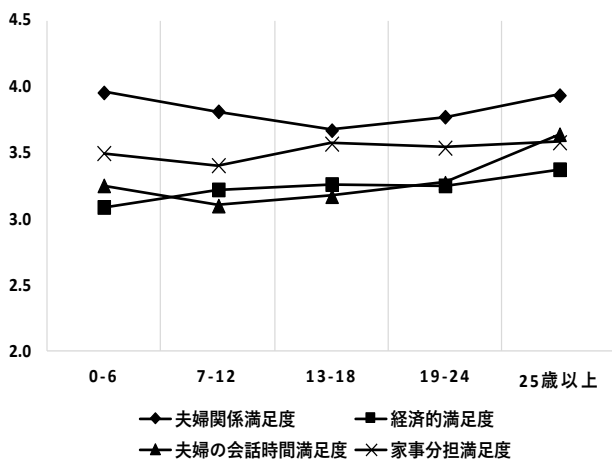


Figure 5 末子年齢別にみた夫の満足度

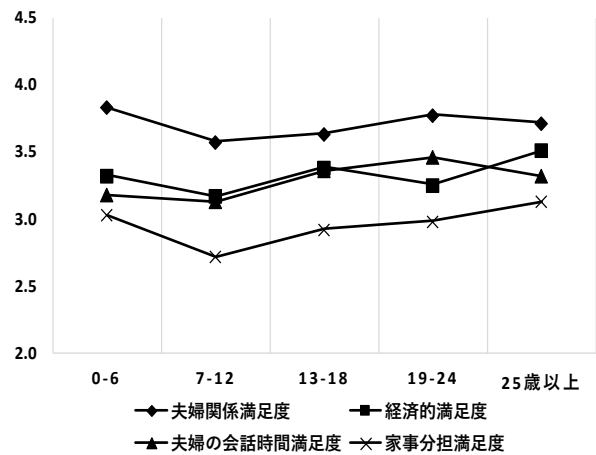


Figure 6 末子年齢別にみた妻の満足度

Table 4 夫と妻の末子年齢別平均年齢

		0-6	7-12	13-18	19-24	25歳以上
夫	人数	220	86	96	68	77
	平均年齢	35.34	42.26	47.94	53.22	61.58
妻	人数	233	93	108	78	84
	平均年齢	33.81	40.65	45.62	50.64	58.17

欧米の研究では、子を持つ夫婦（以下、有子夫婦）のライフステージにおいて低下した夫婦関係満足度が回復するのは子の離家とされている。本研究のデータでは、子が別居して夫婦だけの世帯（子の離家後の夫婦群）は夫63人、妻64人で、平均結婚年数は夫婦とも31.1年（夫14-58年、妻21-53年）、

であった。一方、子と同居する核家族世帯（子の離家前の夫婦群）は夫 355 人、妻 383 人で、平均結婚年数は夫 13.94（1-43 年）、妻 14.48（0-41 年）であった。両者の年齢や結婚年数を合わせるために、結婚年数 21-41 年の夫婦に限定して、夫・妻別に子の離家の有無による夫婦関係満足度、経済的満足度、会話時間満足度、家事分担満足度の差異について検討した（Table 5）。その結果、夫・妻ともに全ての満足度において有意差は示されなかった。

Table 5 子の離家の有無による夫・妻の満足度

			年齢	結婚年数	夫婦関係満足度	経済的満足度	会話時間満足度	家事分担満足度
夫	子同居	平均	53.98	27.56	3.62	3.11	3.28	3.56
	(N=80)	SD	5.63	4.66	0.85	1.09	0.98	0.88
	子別居	平均	55.96	29.69	3.81	3.22	3.45	3.65
	(N=55)	SD	6.34	5.78	0.89	0.94	0.90	0.91
		t 値	1.91 †	2.27 *	1.30	0.59	1.08	0.59
妻	子同居	平均	51.33	27.72	3.62	3.28	3.25	2.96
	(N=95)	SD	5.42	4.88	0.97	1.10	1.21	1.34
	子別居	平均	53.40	29.67	3.78	3.55	3.42	3.25
	(N=60)	SD	5.64	5.61	0.84	1.08	1.14	1.35
		t 値	2.28 *	2.22 *	1.06	1.48	0.84	1.32

† $p < .10$, * $p < .05$

子の数による満足度の差異

子の数について、0 人、1 人、2 人、3 人以上の 4 群に分類し、夫妻別に 4 群間で夫婦関係満足度等について 1 要因の分散分析を行った。その際、子が 0 人の夫妻では結婚年数が短い若年夫婦が含まれるため、年齢や結婚年数の差を無くすために、結婚年数 5 年以上の夫と妻を分析対象とした。Figure 7 に夫の結果を、Figure 8 に妻の結果を示した。Table 6 に各群の人数と平均年齢を示した。

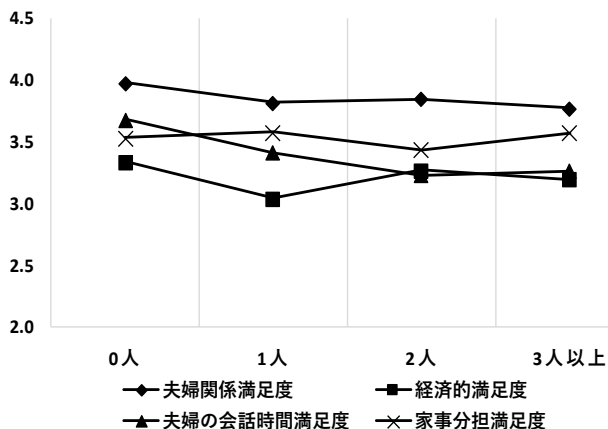


Figure 7 子の数別にみた夫の満足度

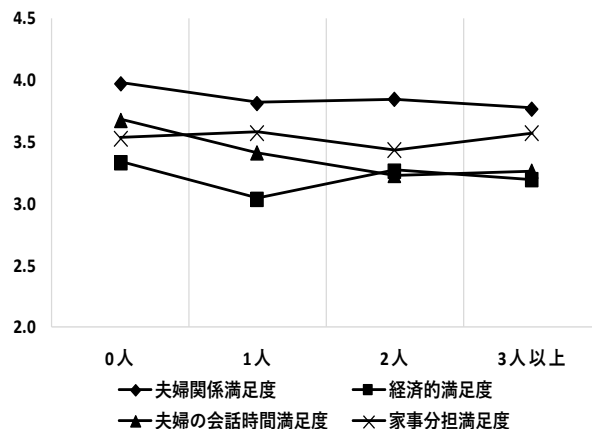


Figure 6 子の数別にみた妻の満足度

Table 6 夫と妻の子の数別平均年齢

		0人	1人	2人	3人以上
夫	人数	41	67	293	136
	平均年齢	46.41	46.04	44.99	47.63
妻	人数	37	72	320	152
	平均年齢	44.68	43.19	43.63	44.66

分散分析の結果、夫では会話時間満足度においてのみ群間に有意差が示された ($F(3, 533) = 3.62, p < .05$)。下位検定の結果、子どもが0人の夫では、2人、3人の夫より有意に会話時間満足度が高かった ($p < .05$)。夫婦関係満足度、経済的満足度、および家事分担満足度では群間に有意差は示されなかった ($F(3, 533) = 0.79, n.s.; F(3, 533) = 1.25, n.s.; F(3, 533) = 1.04, n.s.$)。一方、妻では、家事分担満足度においてのみ群間に有意差が示された ($F(3, 577) = 3.41, p < .05$)。下位検定の結果、子どもが0人の妻では、2人、3人の妻より有意に家事分担満足度が高かった ($p < .05$)。夫婦関係満足度、経済的満足度、および会話時間満足度では群間に有意差は示されなかった ($F(3, 577) = 0.75, n.s.; F(3, 577) = 1.00, n.s.; F(3, 577) = 1.65, n.s.$)。

夫婦関係満足度の規定要因

夫婦関係満足度は、子の離家や子どもの数では差異が示されず、年齢や結婚年数による差異が顕著に示された。また、年齢、結婚年数、末子の年齢には高い相関が示されている (Table 7)。そこで、結婚年数別に夫婦の関係満足度の規定要因を検討するために、経済的満足度、会話時間満足度、家事分担満足度、および子の数を独立変数とし、夫婦関係満足度を従属変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った (Table 8)。

Table 7 夫・妻における各変数間の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 年齢		.943***	.918***	.214***	-.041	.139**	.137**	.063
2. 結婚年数	.962***		.963***	.241***	-.055	.133**	.114**	.046
3. 末子年齢	.934**	.961**		.089*	-.040	.118**	.126**	.040
4. 子どもの数	.189***	.219***	.061		-.074	.030	-.045	-.012
5. 夫婦関係満足度	-.070	-.055	-.039	.010		.280***	.395***	.249***
6. 経済満足度	.072	.063	.057	.007	.392***		.265***	.122**
7. 会話時間満足度	.063	.074	.083*	.036	.413***	.266***		.357***
8. 家事分担満足度	.037	.032	.039	-.054	.387***	.225***	.341***	

注1) 右上が夫 (N=547), 左下が妻 (N=596)

注2) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 8 結婚年数別にみた夫婦関係満足度の規定要因

夫	標準化偏回帰係数						
	0-4	5-9	10-14	15-19	20-24	25-29	30年以上
<独立変数>							
経済的満足度	.280 **	.175	.194 *	.030	.299 **	.222	.153
会話時間満足度	.137	.167	.317 ***	.494 ***	.384 ***	.624 ***	.584 ***
家事分担満足度	.318 **	.245 **	-.076	.082	-.011	-.061	.040
子の数	-.141	-.113	-.049	.071	.104	-.034	.054
R^2	.216	.060	.143	.244	.291	.389	.341
Adjusted R^2	.199	.052	.128	.234	.271	.380	.333
妻	0-4	5-9	10-14	15-19	20-24	25-29	30年以上
経済的満足度	.419 ***	.310 ***	.283 **	.301 **	.363 ***	.257 *	.176
会話時間満足度	.061	.139	.184 *	.286 **	.474 ***	.251 *	.634 ***
家事分担満足度	.334 ***	.344 ***	.333 ***	.201 *	-.006	.303 **	.172
子の数	-.041	-.006	.145	-.100	.052	.183	.032
R^2	.335	.217	.315	.286	.471	.384	.402
Adjusted R^2	.321	.204	.296	.261	.458	.358	.396

注1) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

考 察

調査データの妥当性

本研究のデータは留置法によるアンケート調査で、回収率（36.8%）は、堀口（2002：42-52%）、岩間（1997：64%）、藪垣・渡辺・田川（2015：56-69%）など夫婦関係に関する同様の調査研究に比べて低い。アンケート用紙の配布、回収の仕方が夫婦の一方から他方へ渡し、別々に返送することから、夫婦関係の良くない夫婦では用紙が一方に渡らなかつたり、返送されなかつたりしたことが考えられ、そのため本研究の結果の夫婦関係満足度は高い方に偏ったことが考えられる。しかし、回答者の年齢は20代から80代、結婚年数は0年から30年以上に広範囲に及び、結婚年数に極端な偏りはなかつたことから、夫婦関係満足度の相対的な経時変化を見る上では問題のないデータといえる。

分析のまとめと傾向

夫婦関係、経済、会話時間、家事分担の4つの満足度と、年齢、結婚年数、末子年齢、子の離家、子の数の4つの規定要因との関係有意性をTable 9にまとめた。どの満足度においても有意な差がある要因は夫婦間で違いが見られたが、4つの要因の中で有意な差がある満足度が多いのは夫婦とも年齢と結婚年数であった。年齢と結婚年数とは強い相関があり、片方が主要因なのか、同程度に要因になっているかは本研究では不明であるが、有意な差がある満足度の種類が夫婦で異なることが表から見てとれる。すなわち、夫婦関係満足度は夫婦ともそれらの要因と有意に関係するが、夫婦関係満足度の背景にあるとみなされる他の3つの満足度は夫婦間に違いがあることが示された。以下、それぞれの満足度について、夫婦間の違いや要因を推察する。

Table 9 本研究の分析結果のまとめ

	夫婦満足度		経済的満足度		会話時間満足度		家事分担満足度	
	夫	妻	夫	妻	夫	妻	夫	妻
年齢	*	**	*	<i>n.s.</i>	+	<i>n.s.</i>	+	**
結婚年数	***	*	*	<i>n.s.</i>	***	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	**
末子年齢	*	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	**	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
子の離家	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
子の数	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	*	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	*

注1) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

夫婦関係満足度の U 字型変化

まず、夫の夫婦関係満足度は、年齢、結婚年数、末子年齢での差異は示されたが、子の離家といったライフステージによる差異や子の数による差異は示されなかった。妻においても同様で、年齢と結婚年数による夫婦関係満足度の差異は示されたが、それ以外の要因による差異は認められなかった。

本研究の横断的調査データでは、夫の結婚年数による夫婦関係満足度の差異は有意であり、結婚 20–24 年まで有意に下がり、その後上昇する U 字カーブを描いた。しかし、最低値の 20–24 年と 30 年以上の差は有意ではなく、晩年に夫婦関係満足度が上昇する傾向は証明できなかった。満足度は個人差が大きいデータであるため、もし U 字型であるとしたら、それを証明するためにより大きなデータが必要であることがうかがわれる。一方、妻の夫婦関係満足度も結婚後 15–19 年まで有意に下がり続け、その後は夫よりも変化が小さく、全体として L 字型に近い変化を示した。パネルデータを分析した Glenn (1998)、VanLaningham et al. (2001)、永井 (2005) では、夫婦関係満足度は結婚後一貫して下がり続けるとされている。パネルデータの分析方法には固定効果モデルとランダム効果モデルがあり、VanLaningham et al. (2001) や永井 (2005) は固定効果モデルを使っている。山口 (2007) は、永井 (2005) と同じデータを用い、両方のモデルを使って分析した結果、固定効果モデルでは U 字型変化を支持しないが、ランダム効果モデルでは説明変数としての結婚（継続）年数の 2 乗項が有意になり、U 字型説を支持したとしている。どちらのモデルを使うべきかの判断はハウスマン検定で行われるが、それも統計的検定であり、常に正しい判断であるとはかぎらない（奥井，2015）。実際、パネルデータを分析して、夫婦関係満足度や結婚満足度が年齢に伴って U 字型に変化することを示した研究も出てきている（Movshuk, 2011; 周，2014）。夫婦関係満足度が U 字型になるかどうかについては今後も議論が必要であり、結婚中期以降を対象にしたさらなる研究が求められる。

経済的満足度・夫婦の会話時間満足度・家事分担満足度の差異

まず、経済的満足度については、夫のみで年齢や結婚年数による差異が示され、60 歳代以降の夫の満足度が若年者より高かった。これは、男性では年齢階級が高まるとともに賃金が上昇し、50～54 歳で賃金がピークとなる（厚生労働省，2018）からだと考えられる。一方、妻では、結婚年数による経済的満

足度の差は示されなかった。この背景には、妻における経済的満足度のライフスタイルによる差異があると推測される。内閣府（2018）による女性の年齢階級別労働力率をみると、子育て期の女性の離職状況はM字曲線を描いており、出産や子育てで離職したり、休職したりしている者が少なからずいる。また、離職した妻が再就職する場合にも、ライフステージに関わらず、常勤であるか非常勤であるかによって、かなり収入の満足度には差が生じる可能性がある。そうした妻のライフスタイルの多様性が、夫のように年齢や結婚年数による経済的満足度の差異が示されなかった一因と考えられる。

夫婦の会話時間満足度においても、夫のみにおいて結婚年数、末子年齢、子の数による差異が示された。また、子どもの年齢や数が夫の会話時間満足度に影響を与えていた。子が低年齢であったり、数が多かたりする場合には、その世話を時間が取られ、当然ながら夫婦の会話時間は少なくなると考えられるが、満足度への影響は夫と妻で異なる。夫は妻より、落ち込んだ時に配偶者を頼りにするという情緒的サポートを多く得ている（稲葉，2004）が、妻が子育てに時間を割かれると、そのサポートが得られにくくなる。こういった状況が、会話満足度に反映したのではないかと推察できる。

一方、家事分担満足度では、妻のみにおいて年齢、結婚年数、子の数による差異が示され、結婚年数が浅い若い妻や、子を持たない妻の満足度が高く、妻の夫婦関係満足度の特徴と合致していた。これは、家事量が相対的に多くない層であるため、配偶者の分担の有無に関わらず負担感がさほど高くないことによると考えられる。

以上のように、経済的満足度・夫婦の会話時間満足度・家事分担満足度における結婚年数や子ども要因による差異についてはジェンダー差が顕著にみられた。

夫婦関係満足度の規定要因の検討

結婚年数別に夫婦関係満足度の規定要因について検討した結果、結婚年数によって規定要因に差異が示されることが明らかとなった。結婚年数10年未満までの夫では家事分担満足度が、それ以降では夫婦の会話時間満足度が夫の夫婦の関係満足度に影響していた。家事分担満足度は、配偶者による家事分担の多さにより高まると考えられる。結婚年数が10年未満の子育て期に当たる夫では、妻による食事の世話などの実質的なサポートの満足度が夫婦の関係満足度に影響するといえる。一方、結婚年数10年以上の夫においては、家事分担より妻とのコミュニケーションという情緒的サポートの満足度が夫婦関係満足度を規定することが示唆された。男性の場合、自己開示の対象が配偶者に限定されており、情緒的なサポート源が配偶者に集中しているということもあり（伊藤，2008）、妻との会話満足度は夫婦の関係性を左右する影響因であると考えられる。

一方、妻では、夫婦関係満足度が低下している結婚年数10年未満までは経済的満足度と家事分担満足度の影響が強く、それ以降は会話時間満足度の影響もみられるようになり、30年以降は夫と同様に会話時間満足度の影響が強くなっていた。妻の場合、結婚年数30年未満までは一貫して実質的サポート

の夫婦関係満足度への影響がみられる。妻は出産や子育てで離職したり、休職したりする者が少なからずいるため、自身や家族全体の収入は減少することになり、それだけ経済的安定への希求が高まることが一因と考えられる。また、夫の家事や育児の役割分担と妻の夫婦関係満足度との関係は、妻の就業や収入、性別役割意識などによって変わり単純ではないが、総じて夫の家事や育児の分担割合と妻の夫婦関係満足度との間に正の相関があることが知られているが（木下，2004；桐野・朴・近藤・佐々井・高橋・中嶋，2011；永井，2011；末盛・石原，1998），本研究の結果もこれに合致している。結婚年数30年以上の子育てが終わった中年期以降の妻では、夫と同様に配偶者に情緒的サポートを求めているといえる。

夫婦関係満足度を規定する変数のもつ意味が、性別やライフステージによって必ずしも同一でないことが示唆されている（木下，2004）が、本研究においても、夫と妻の夫婦関係満足度を規定する実質的サポートが意味するところも異なると考えられる。この違いを生じさせる要因は、性別役割分業体制とそれに基づく妻のライフスタイルの多様性であろう。

本研究のまとめと限界

本研究では横断的調査のデータをもとに、結婚年数と夫婦関係満足度との関係を探った。その結果、結婚年数による夫婦関係満足度の平均値のプロフィールは、結婚初期から満足度は有意に低下して中期に最低値になり、その後、夫は上昇するU字型、妻はあまり変化しないL字型に近い変化を示したが、中期以降の変化は有意ではなかった。夫婦関係満足度の規定要因は結婚年数によって異なり、同一の規定要因であったとしても性別によってその意味が異なる可能性がある。今後は実質的サポートについて自身と配偶者の貢献度なども含めて検討し、夫婦間のずれが夫婦関係満足度に与える影響について詳細に検討したい。また、本研究では高齢期の夫婦のデータ数が少なかつたため、今後中年期以降のデータ数を増やして再検討する必要がある。

末子年齢、子の離家、子どもの数といった子どもに関わる要因は、夫婦関係満足度に有意に影響はしていなかったが、規定要因である夫婦の会話時間満足度や家事分担満足度に影響しており、間接的に影響をもたらすと考えられる。今日、少子化が最大の社会問題の1つになっていることから、子どもに関わる要因と夫婦関係満足度との関連についても更なる検討を進めていきたい。

結婚満足度や夫婦関係満足度などを夫婦関係満足度として論じたが、先行研究で用いられている測定尺度や項目の内容は必ずしも同じではなく、そのことが結果に影響している可能性はあるだろう。今後は、測定指標を統一した上で検討する必要があるだろう。

引用文献

- Anderson, S.A., Russell, C.S., & Schumm, W.A. (1983). Perceived marital quality and family life-cycle categories: A future analysis. *Journal of Marriage and the Family*, 45, 127-139.
- Cowan, P., & Pape-Cowan, C. (1988). Changes in marriage during the transition to parenthood. Michaels, G.Y. & Goldberg, W.A. (Eds.), *The transition to parenthood: Current theory and research* (pp.114-154). England: Cambridge University Press.
- Demo, D.H. & Cox, M.J. (2000). Families with young children: a review of research in the 1990s. *Journal of Marriage and the Family*, 62, 876-895.
- Glenn, N.D. (1998). The course of marital success and failure in five American 10-year marriage cohorts. *Journal of Marriage and Family*, 60, 569-576.
- 堀口美智子. (2002). 第1子誕生前後における夫婦関係満足度 家族関係学, 21, 139-151.
- 池田政子. (2014). 夫婦関係満足度.伊藤裕子・池田政子・相良順子 (著) 夫婦関係と心理的健康 子育て期から高齢期まで (pp. 107-134) ナカニシヤ出版
- 稲葉昭英. (2004). 夫婦関係の発達的变化 渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子 (編) 現代家族の構造と変容 (pp. 261-276) 東京大学出版会
- 伊藤裕子. (2008). 夫婦関係における男性 柏木恵子・高橋恵子 (編) 日本の男性の心理学 (pp.97-119) 有斐閣
- 伊藤裕子. (2014). 研究の目的と調査の概要.伊藤裕子・池田政子・相良順子 (著) 夫婦関係と心理的健康 子育て期から高齢期まで (pp. 1-21) ナカニシヤ出版
- 岩間暁子. (1997). 性別役割分業と女性の家事分担不公平感—公平価値論・勢力論・衡平理論の実証的検討— 家族社会学研究, 9, 67-76.
- 木下栄二. (2004). 結婚満足度を規定するもの 渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子 (編) 現代家族の構造と変容 (pp.277-291) 東京大学出版会.
- 桐野匡史・朴 志先・近藤理恵・佐々井司・高橋重郷・中嶋和夫. (2011). 共働き世帯の父親の育児参加と母親の心理的 well-being の関係 厚生指標, 58, 1-8.
- 厚生労働省. (2018). 平成 29 年賃金構造基本統計調査の概況. Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/chingin/kouzou/z2017/dl/13.pdf> (2019年1月27日)
- Marini, M.M. (1980). Effects of the number and spacing of children on marital and parental satisfaction. *Demography*, 17, 225-242.
- Miller, R.B. (2000). Misconception about the U-shaped curve of marital satisfaction over the life course. *Family Science Review*, 13, 60-73.
- 諸井克英. (1996). 家庭内労働の分担における衡平性の知覚 家族心理学研究, 10, 15-30.

- Movshuk, O. (2011). Why is Life Satisfaction U-shaped in Age? *Journal of Behavioral Economics and Finance*, 4, 133-138.
- 永井暁子. (2005). 結婚生活の経過による妻の夫婦関係満足度の変化 家計経済研究, 66, 76-81.
- 永井暁子. (2011). 結婚生活の経過による妻の夫婦関係満足度の変化 社会福祉, 52, 123-131.
- 内閣府. (2018). 男女共同参画白書平成30年度版 Retrieved from http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h30/zentai/html/honpen/b1_s02_01.html
- Norton, R. (1983). Measuring marital quality: a critical look at the dependent variable. *Journal of Marriage and the Family*, 45, 141-151.
- 奥井亮. (2015). 固定効果と変量効果 日本労働研究雑誌, 657, 6-9.
- Rollins, B.C., & Feldman, H.H. (1970). Marital Satisfaction over the Family Life Cycle. *Journal of Marriage and the Family*, 32, 20-28.
- 佐々木裕・高橋真理. (2007). 父親からみた第一子出生前後における夫婦関係の評価—家族イメージ法による分析を中心に— 家族看護学研究, 13, 53-59.
- 末盛 慶・石原邦雄. (1998). 夫の家事遂行と妻の夫婦関係満足感—NSFH (National Survey of Families and Households) を用いた比較— 人口問題研究, 54, 39-55.
- 周玉慧. (2014). 変動の中の現代日本における既婚者の夫婦関係と結婚満足度 周玉慧 (主編). 現代日本の社会心理と感情 (pp. 124-171) 臺北: 中央研究院人文社會科學研究中心
- Twenge, J.M., Campbell, W.K., & Foster, C.A. (2003). Parenthood and marital satisfaction: A meta-analytic review. *Journal of Marriage and Family*, 65, 574-583.
- VanLaningham, J., Johnson, D.R., & Amato, P. (2001). Marital happiness, marital duration, and the U-shaped curve: Evidence from a five-wave panel study. *Social Forces*, 79, 1313-1341.
- White, L., & Edwards, J.N. (1990). Emptying the nest and parental well-being: An analysis of national panel data. *American Sociological Review*, 55, 235-242.
- 藪垣 将・渡辺美穂・田川 薫. (2001). 中年期における夫婦関係満足度および諸変数の関連—多母集団同時分析による JGSS-2006 の検討— 家族心理学研究, 29, 51-63.
- 山口 一男. (2007). 夫婦関係満足度とワーク・ライフ・バランス 季刊家計経済研究, 73, 50-60.

脚注

- 1) 日本では夫婦関係満足度のほかに結婚満足度という尺度もよく使われている。その定義は研究者によって必ずしも同じではないが、漢字の意味からは前者は夫婦間の関係性に主眼がおかれているのに対し、後者は夫婦関係を含めて結婚生活に関わる広い観点からの評価であるといえよう。全くの同義とは言えないが、どちらも配偶者との関係性を含んでいるため、本稿ではそれらの文献を引用する場合は夫婦関係満足度と訳す。

Changes of Marital Satisfaction Over Years: U-shaped Curve and its Factors

Junko AKAZAWA

The cross-sectional data on various-aged 632 husbands and 677 wives were analyzed to examine the change of marital satisfaction over years and its factors. Changes of marital satisfaction according to marital duration were significant in both husbands and wives. However, differences in the satisfaction between the middle and long marital durations were not significant and therefore it could not be concluded whether the pattern of the change was U-shaped or not. Analyses on economic satisfaction (EC), satisfaction with conversation length with partner (CO), satisfaction with housework sharing (HW) as a factor of marital satisfaction, revealed that effective factor until the 10-year marital duration was HW for husbands and EC and HW for wives while after then it was CO for both husbands and wives.

【Key words : marital satisfaction, cross-sectional data, marital duration】